

漢方医学の基礎理論に関する研究



【中野キャンパス】薬学部 薬学科 准教授

鈴木 達彦 Suzuki Tatsuhiko

URL: [帝京平成大学 教員業績紹介ページ](#)

キーワード: 傷寒論・田代三喜・曲直瀬道三・能毒・察証弁治



研究の概要

SDGs 目標 3: すべての人に健康と福祉を

SDGs 目標 4: 質の高い教育をみんなに

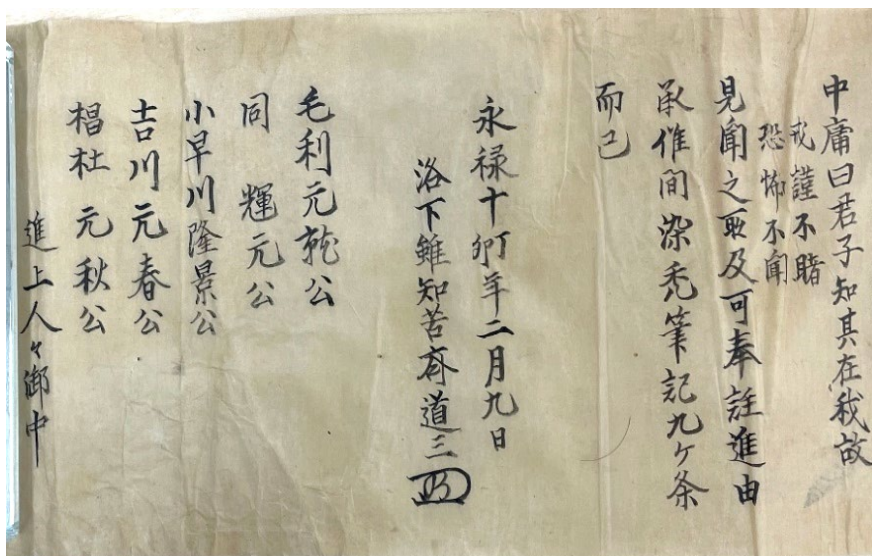
江戸時代は我が国独自の医学体系が築かれたことで知られており、この時代の漢方医学を研究することは現代における漢方治療を考え、またその発展を図る上で重要です。

江戸時代における医学の発展の要因となった室町後期から安土桃山時代に活躍した田代三喜(たしろさんき)と曲直瀬道三(まなせどうさん)による「能毒」(薬物書)は日本漢方の薬物理論の根底となったはずですが、今日のものとは大きく異なります。三喜と道三は、既存の処方を用いずに、その都度患者の状態に合わせて、1つ1つ生薬を選んで処方を組み立てていく察証弁治という治療体系をとっており、この治療においては薬物理論が取り分け重要であったはずですが。薬物理論と臨床における運用法との関係が明らかになることは、伝統医学における文献的研究の意義を高め、今日の臨床においても大きな示唆を与えるでしょう。

また、伝統医学における教育体系を理解する上で、曲直瀬道三が門人に授与した『切紙(きりがみ)』の研究は極めて重要です。『切紙』は、道三が門人の習熟段階に応じて授けた医術の秘訣であり、当時の段階的な教育課程を象徴する資料です。切紙の研究により伝統医術継承のシステムが明らかになり、日本漢方の教育史における新たな知見を提示できます。

漢方医学の研究では、生理論や治療論に立ち返った考察も必要です。

『傷寒論』、『金匱要略』は今日でも重要な医学書です。これらの研究は盛んでありましたが、定着した解釈には達していません。基礎理論に立ち返り、『傷寒論』『金匱要略』を追求することは漢方治療の発展につながると考えます。



曲直瀬道三が毛利元就らに送った書翰(1567年)

実学へのつながり・産業界や自治体へのアピールポイント・協力可能事項・協力希望事項

日本の漢方医学は、中国から多くの影響を受けたことは間違いありませんが、独自の発展を遂げたことも確かです。日本漢方を理解することは、自国の文化や風土を理解することにつながり、尊厳を与えるものになります。国際疾病分類第11回改訂版(ICD-11)においては、東アジアの伝統医学の分類も設けられ、中韓に対して日本漢方独自のものも採用されています。本研究によって伝統医学的な治療において具体的な運用法を広げていくという実学につながる面があります。

知的財産・論文・学術発表など(詳細は右上QRコードの教員紹介からご確認ください)

- ・「生薬とからだをつなぐー自然との調和を目指した生薬の使い方」
- ・「『腹証奇覧』の版種の異同とその要因について 和久田叔虎による『腹証奇覧』の校正の可能性」